



「船場橋」 熊本地震前の姿に復旧



復旧工事がほぼ終了した船場橋。写真は上流側
|| 2020年3月2日、中村まさあき撮影

2016年4月の熊本地震で被災した熊本県宇土市の石造アーチ橋「船場橋」(市指定有形文化財)の復旧工事が2020年2月にほぼ終わり、震災前の姿を取り戻している。供用は3月中の予定。

宇土市教育委員会の発表によると、船場橋は地震の激しい揺れにより高欄が倒壊、輪石がずれて開きが生じ、石材に亀裂や断面欠損も見られた。壁石が外側へ約5センチはらみ出し、橋面が沈下。壁石の内側の中詰め材も激しく動き、橋全体が大きなダメージを受けた。また上流左岸の取り付け護岸の石垣が大きく崩れた。

16年7～8月に3Dレーザー計測解析などによる被害調査が行われ、石橋としての健全度が失われた状態と判明した。そのため橋は、輪石の基底部を除き一度解体して復元されることとなった。基底部を残したのは、全て輪石を取り除くと、不均等な地盤沈下が発生する可能性があるためである。

18年4～6月に解体工事が実施され、石材は隣接地に一時保管された。各石材に刻印や墨書きなどは確認されなかったが、新たに分かったこともあり、昨年11月に市教委による現地説明会が開催され



被災後の船場橋の上流側
=2016年5月2日、中村まさあき撮影

た(2面に関連記事)。

船場橋は、熊本藩の住民の評価や褒章などを記録した古文書「町在」に「石之瀬目鑑橋」と記載されている。架橋を担当した石工や架橋年は特定されていないが、宇土郡の土木工事担当役人だった平原太郎助と芥川政右衛門の記録から架橋年は1855～57(安政2～4年)と推定されている。

今回の船場橋復旧工事では監理を「建設プロジェクトセンター」(中村秀樹社長は本会調査研究部長)、施工を「尾上建設」(尾上一哉会長は本会技術部長)が受託し、肥後種山石工技術継承講座二期生の荒木大人氏が石工頭を務めた。

(広報部)

中面の案内

2面 「中国の古橋」撮影記その3 (榊 晃弘)

4面 諫早眼鏡橋 架橋180周年

3面 長崎・島原半島への旅 (末永暢雄)

6面 「温故石拱記」岩永三五郎・朱夏編 (上塚尚孝)

船場橋復旧工事の過程で 転用石材の使用を確認

船場橋の修復工事について昨年11月、宇土市教育委員会による現地説明会が開催され、工事の過程で判明したことが説明された。(広報部)



輪石背面の四角形のホゾ穴。ホゾ穴のある石材は桁橋や樋門などに使用されていた石材の転用か
=2018年5月6日撮影

アーチ頂部付近の輪石背面だけがすり減っている。かつては頂部付近のみ路面であった可能性もある
=2019年11月30日撮影 写真提供/中村まさあき

解体した船場橋の輪石の数は計153石あり、淡紅色と灰白色の2種類の阿蘇溶結凝灰岩(馬門石)が使用されていた。色の異なる馬門石は共に宇土市を流れる網津川流域で産出されたものだが、採石場所が異なるという。輪石に使用された石材のうち淡紅色が25石、灰白色が128石あり、淡紅色の13石と灰白色の3石に四角形のホゾ穴が確認された。これらの石材は輪石の背面や石材同士の間接合面(合端)など、外から見えない箇所で使用されている。そのことから、かつては桁橋や樋門などの石材だったが、使われなくなったために転用して活用したのであると説明された。

転用石材を除く灰白色石材は、厚さが42センチ(1尺4寸)前後とほぼ同じサイズであるのに対し、淡紅色の転用石材は薄くサイズも不ぞろいである。そのことから、転用石材を除く灰白色石材は船場橋築造の際に調達された石材である可能性が高い。

船場橋は高欄に淡紅色の馬門石、壁石に灰色の安山岩、輪石正面に灰白色の馬門石が使用されている。宇土市文化課の担当者は、この色分けを「架橋時の職人の美意識が感じられる」と評した。

また、輪石背面のアーチ頂部付近の石材がすり減っていることが判明。そのことから、この部分が露出した路面だった時期がある可能性が指摘された。

運河に架かる「船引き橋」

中国大陸を東西に流れる大河「長江」以南を江南地方(浙江省や江蘇省など)という。そこには大小さまざまな運河が網の目のように張り巡らされていて、当然、膨大な数の橋もそこに存在している。今回は運河に設けられた一風変わった「船引き橋」を紹介する。

「中国の古橋」撮影記 その3

神 晃弘 (福岡県)



運河の水の流れと同じ方向に53のアーチが連なる宝帯橋
=中国・江蘇省蘇州市の京杭大運河 写真提供/神 晃弘

下流から上流へとさかのぼるときには風や波の影響を受けやすくなる。そのため、橋に並んだ屈強な男たちが船にくくりつけたロープを引いて船を進めたといわれる。「船を引いた人たちのことを『織夫』といったので、船を引くための橋のことを『織道橋』と呼ぶ」と現地ガイドに教わった。

江蘇省の「宝帯橋」は、北京と杭州をつなぐ全長およそ2500キロの京杭大運河(南北大運河)が澹台湖で交差する場所にある。運河の水の流れに沿って延びる53連のアーチ橋で、全長は317メートル、橋幅は4.1メートル。創建は唐代の816〜19年とされる。いにしへの都、長安へと向かう穀物などを満載した船が運河をさかのぼるとき、橋に並ぶ何十人も織夫たちがロープを引いて船を進めたのだった。

一般に橋は川を横切るものだが、浙江省紹興市の広大な蕭興運河に設けられた「阮社織道橋」は、運河のやや岸寄りであり、水の流れと同じ方向に延びている。全長は386メートルで幅は2.5メートル、橋床(路面)には平らな板石が敷かれ、創建は晋の時代(265〜420年)といわれている。運河を船が

大なる(舟に央)舟に茶、湖に架かる「避塘橋」。風の強い湖の西岸近くに架かる全長3500メートルの長大な橋で、創建は明代の1642年とされる。日の出前から撮影を始めて往復7000メートルを歩いた。撮影を終えたのは昼過ぎになった。この橋が「中国の古橋」取材中、最も長い橋だった。(次号に続く)

九州の石橋を訪ねる旅^⑫ 島原半島の石橋群

副会長 末永暢雄(長崎県)
写真提供/末永暢雄

「九州の石橋を訪ねる旅」は昨年10月で足掛け6年、12回を数え、沖繩を除く九州全県を訪ねた。参加者も年を重ねているが、石橋から「氣」をいただいたのか、ますます元氣。石橋の架かる川に降りる人がいてひやひやさせられることもあるが、架橋にまつわる石工の逸話や石積み表情などに接し、名だたる橋を巡ってきた。その中で、どうしても訪れたい地域が残っていた。それが、長崎県島原半島の石橋群だった。

12回目の旅は17人が参加して昨年10月29・30日の日程で、雲仙市千々石町の



面無橋(南島原市北有馬町)

「八千代橋」を皮切りに小浜町、南島原市の北有馬町や布津町、島原市などの石橋を巡り、13橋を訪れた。

面無橋など5橋が県文化財に

旅の企画を温めていた昨年2月、長崎県南島原市北有馬町の「荒田下橋」「田中橋」「元平橋」「坂下橋」「面無(おもなし)橋」が、県の有形文化財に指定された。振り返ると、石橋を訪ねて九州各地を巡り始めたころ、こ

れらの橋との出会いは大変なショックだった。それは、やれ円周率だの、秘伝の架橋技術だの、石工の技だのと、石橋に見え隠れする「文学的ロマン」では収まりがつかなかったからである。石橋に造詣の深い会員の皆さんは、どのような見方をされるのだろうか。

面無橋は1804(文化元)年の架橋と伝承されている。輪石は緻密な計算によって加工されたものではなく、石の表情は周辺の棚田となんら変わらない。北有馬町には10橋の石橋が現存するが、そのうちの半数が自然石を使った同様の架橋方法であると見られる。こうした橋は1982年の大洪水で



荒田下橋(南島原市北有馬町)

流失するまで、陶器の窯元・現川(うつつがわ)焼で知られる長崎市の現川地域にもあった。その小藤橋ほか3橋の石橋はもともと素朴な石積みで、それらは現在、長崎市の本河内高部ダム底に沈む「まぼろしの石橋」(幕末期架橋)を参考にして架けられたといわれている。

しかし、島原半島の自然石積みの石橋群は、架橋の年代からダム底の石橋との関連性はなく、この地で生まれ育った石工独特の技と言ってもいいように思える。それらは棚田の石積みの習練された石工の技と地元農民が総力を挙げて架けたものであると考えられ、石橋はいまや地方の生活や農業文化の発展を支えてきたシンボルとなっている。

ちなみに、面無橋など南島原市の5橋を文化財に指定するよう県教育委員会へ答申した県文化財保護審議会は、「地域の特性を残した、地方の近代化を象徴する土木構造物」と評価している。私としては前述のように、石工の技や農民の総力を語り継いでいきたい。思いがある。参加者の一人は面無橋を前にして、こぼれそうな笑みをたたえ「抱きしめたい!」と声を上げた。これまで

数多くの石橋を見てきた参加者から、そんな声を聞くのは初めてのことだった。うれしかった雲仙市の対応

雲仙市小浜町の「北串の眼鏡橋」(明治期架橋)も自然石が使われた石橋。6月の下見の際は壁石に根付いた雑木や草ですっかり覆われ、橋がどこにあるのか分からないほどだった。そこで、雲仙市に手紙を送り、石橋は地域発展を願った先人の労苦を物語る文化財であると訴えた。それに対し市は、すぐに現状を視察し整備の計画を知らせてくれた。それには心底頭が下がった。訪れた日、橋と周りの草木はきれいに払われていた。

われわれは温泉を楽しみ、紅葉に染まりゆく島原半島の石橋を巡る旅を終えた。観光資源の多い島原半島にあつてもすれば棚田の草むらに埋もれ、忘れ去られそうな石橋。しかし、それを「大切に守り伝える」ことを実践されている人も出会え、また一つ旅を刻んだ。



北串の眼鏡橋(雲仙市小浜町)

諫早眼鏡橋 築造から180年 眼鏡橋の歴史と文化を繋ぐつな

長崎県諫早市の「諫早眼鏡橋」は2019年に築造180周年を迎えた。1957(昭和32)年の諫早大水害後、石橋として初の国指定重要文化財となり、諫早公園内に移築・保存された。その際に製作された5分の1スケールの石造模型「ミニ眼鏡橋」も2012(平成24)年、ついに「里帰り」が実現した。「親子眼鏡橋」と呼ばれる両橋に深く関わった「眼鏡橋の歴史と文化を繋ぐ会」会長の伊藤秀敏氏に、これまでの活動について聞いた。(広報部)

写真提供/中村まさあき

実験用模型「ミニ眼鏡橋」も 諫早眼鏡橋そばに保存が実現



石造模型「ミニ眼鏡橋」(手前)と諫早眼鏡橋(右奥)が保存されている諫早市の諫早公園



「眼鏡橋の歴史と文化を繋ぐ会」会長の伊藤秀敏氏(右)と総務理事の杉本伊織氏(左)



石橋として初の国指定重要文化財となった諫早眼鏡橋

石橋で初の国指定文化財に

諫早眼鏡橋が本明川に架けられたのは江戸後期の1839(天保10)年。永久に流されない橋を造ろうと先人の創意工夫の技術が盛り込まれ、佐賀藩と諫早領主の出資、領民の賦役(ふえき)、僧侶の托鉢(たくはつ)などによって、銀高30貫目余り(諫早家文書)の費用をかけて築造された。橋長49・25mは当時、国内最大の石造2連アーチ橋だった。

ところが大雨が降っても流されないその並外れた強さによって、1957(昭和32)年に起きた諫早大水害では被害拡大の要因と見なされた。しかし当時の諫早市長・野村儀平氏の尽力などもあり、石造アーチ橋としては全国で初めて国の重要文化財に指定され、架橋地に近い現在の諫早公園内への移築・保存が決まった。

移築の専任担当として勤務

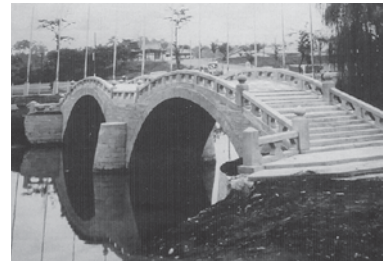
移築に伴い解体された諫早眼鏡橋の石材約2800個は全て計測され、原型と同じ砂岩を使って長さ9・85m、幅1・1m、実物の5分の1スケールの縮小模型が造られた。それは前例のない巨大石造橋の復元方法を検討するため、模型による各種実験が必要だったからだ。

工事は諫早市土木課が取り仕切り、本会の初代事務局長を務めた山口祐造氏(故人)が当時の土木課長として任に当たり、技術専門職として眼鏡橋の専任担当を、現在の「眼鏡橋の歴史と文化を繋ぐ会」会長の伊藤秀敏氏(80)が務めた。

「石の調査から図面の作成までわずか半年でやるよう上司の山口さんから命じられ、模型に使う石材の製作を諫早石工組合にお願いし、毎日、深夜に及ぶ勤務が続いた」と伊藤氏は振り返る。

「諫早眼鏡橋展」

2020年2月21日～3月30日
諫早市美術・歴史館 2F企画展示室
長崎県諫早市東小路町2-33
TEL 0957-24-6611
開館10～19時、火曜休館 ※企画展の観覧無料



ユネスコ村の日本庭園に移築された1964年ごろのミニ眼鏡橋



日本庭園から移築されたミニ眼鏡橋は、高欄の全ての擬宝珠が欠落していた



諫早市に移築するための解体の様子

写真提供/伊藤秀敏

縮小模型橋で実験

1959(昭和34)年9月から翌年7月まで諫早公園近くの作業場で、石材の積み上げの際に生ずる誤差や支保工の構造、強度試験(石材耐圧力、石材を削ることなく現寸法に組み立てる工法など)、模型を使って数々の実験を積み上げた。

そんな中、作業場に住民が乱入した。「ここで何ばしよつか、やめる。遊びのこたつことして」と怒鳴り、模型用の石材を投げた。そのため精密に加工された石材数個が損傷したこともあった。伊藤氏は「諫早眼鏡橋のそばで多くの死者も出ているので、水害後は眼鏡橋を恨む住民もいた」と静かに語る。

60年12月から復元のための基礎工事に着手し、翌61年9月に工事は完了。模型を使った実験のおかげで復元工事は何の問題もなく順調に進んだ。しかし当時被災復旧事業を優先する必要があり、加えて住民の中には諫早眼鏡橋を見て心を痛める人もいた事情もあり、野村

市長も石造模型の保存場所を諫早市内に見つけることはできなかった」

伊藤氏は報告書作成などの業務を終え、62年3月に眼鏡橋の担当から解放された。

実験に使用した諫早眼鏡橋の模型「ミニ眼鏡橋」は、

埼玉県所沢市の「ユネスコ村」(当時)に移設・保存さ

れることが決まり、伊藤氏は64(昭和39)年10月、現地に約1カ月間滞在して組み立ての技術指導に当たった。ミニ眼鏡橋は当時、池のある日本庭園で美しい姿を水面に映していたという。

放置され無残な姿に

時は流れ、ユネスコ村は1993(平成5)年から「ユネスコ村大恐竜探検館」として新装開業するが、2006(平成18)年に営業を休止。ミニ眼鏡橋は放置され破損が進んでいるとの連絡が入る。伊藤氏が42年ぶりに現地を訪れたとこ

里帰りの実現を目指す

諫早市に戻った伊藤氏は、日の出町住民を中心とする「眼鏡橋模型里帰り市民有志の会」を立ち上げた。2012年に

ろ、日本庭園があった場所には新しいレジャー施設が建っていた。ミニ眼鏡橋は少し離れた保育園横の小さな公園に移され、高欄の擬宝珠(ぎぼし)がことごとく折られた状態だったという。「ミニ眼鏡橋の寂しそうな姿が強く印象に残り、何とも言えない複雑な気持ちになった」と当時の心境を話す。

郷土の誇り 親子眼鏡橋

次世代に語り伝えたい

は市内35団体が構成する「ミニ眼鏡橋の里帰り委員会」(会長は諫早商工会議所高尾茂会頭)が発足し、伊藤氏もその事務局長として、移築費用1500万円を目標に寄付金集めに奔走した。

やがて移築先は諫早眼鏡橋そばの現地在と決まり、関係者の努力と市民の協力が実を結んで費用のめどがついたので、12(平成24)年8月からミニ眼鏡橋の復元工事に着手。その直後に池を造るための庭石などの提供を国土交通省から受けることができ、長崎県建設業協会諫早支部の協力を得て池の造成も行わ

れた。復元は10月末までに終わり、12月に竣工式が執り行われた。

「先人が残した諫早眼鏡橋は市民の誇り。その移築もミニ眼鏡橋がなければ実現できなかった。サイズは小さいがミニ眼鏡橋は、諫早眼鏡橋が現在の場所に生まれ変わるための“生みの親”の役割を果たしたと思う。両橋はまさに『親子眼鏡橋』と言える」と語る。

諫早のシンボルに

2017(平成29)年7月、親子眼鏡橋を諫早のシンボルとして保存していくために、伊藤氏を会長とする11人で「眼鏡橋の歴史と文化を繋ぐ会」が結成され、市の地域活性化事業に参加して記念誌「歴史とロマンのいさはや眼鏡橋〜ミニ眼鏡橋が語るもの〜」や紙芝居、DVDなどを制作。翌18年2月にはイベント「眼鏡橋フェスタ」が開催され、伊藤氏が講演し、紙芝居やDVDの披露、劇団による「いさはや眼鏡橋今昔物語〜ミニ眼鏡橋の帰郷〜」などが上演された。同会の総務理事を務める杉本伊織氏(72)は「これからも親子眼鏡橋を郷土の誇りとして、次世代に伝えていきたい」と思いを話す。

諫早眼鏡橋は昨年、築造180周年の節目を迎え、生涯学習講座で伊藤氏が「親子眼鏡橋物語」と題する講演を行った。諫早市美術・歴史館では3月30日まで「諫早眼鏡橋展」が開催されている。

文化貢献を表彰

地域文化功労者に
上塚尚孝氏
伊東孝氏

本会会員の中から会長の上塚尚孝氏（熊本県）と伊東孝氏（神奈川県）が昨年11月、地域文化の振興への貢献を文化庁が認める「地域文化功労者」文部科学大臣表彰を受けた。

上塚氏は長年、熊本県の八代市文化財保護委員や下益城郡城南町（現・熊本市南区城南町）文化財保護審議員を務め、伊東氏は長年、埼玉県文化財保護審議会委員などを務めた。


竹下輝幸氏が
旭日単光章

2019（令和元）年の秋の叙勲では、文化財保護功労者として、熊本県の山鹿市文化財保護委員会委員長を務める会員の竹下輝幸氏（熊本県）が「旭日単光章」を受けた。

なお、2013（平成25）年には行政相談功労者として、元山都町長で本会元会長の甲斐利幸氏（同県）と元山鹿市長で本会副会長の河村修氏（同県）が「旭日小綬章」を受けている。

（広報部）
※文化財に関連する会員の表彰の情報は事務局広報部宛にお寄せください。

「松合橋」 熊本県宇城市 晴れて200歳

会長 上塚尚孝（熊本県）

熊本県宇城市不知火（しらぬい）町の「松合橋」が今年、築造200年を迎える。渡り5間（橋長8㍎）、幅2間（橋幅4㍎）の小さな石橋ながら、近くの国道266号を通る路線バスが毎日、この橋の路面を通過している。

松合は九州のほぼ中央、熊本県の西側に突き出た宇土半島の南岸に位置し、波静かな内海の八代海（別名・不知火海）に面した小さな港町。かつて帆船が行き交ったところに海上交通の拠点として栄えた歴史を持つ。

地元郷土史家の嶋谷力夫さん（故人）が発見した記録によると松合橋は、「文政3年（1820年）、野田嶋右衛門なる人物が松合村の土橋4カ所のうち1カ所を目鑑橋（めがねばし）に架け直すよう仰せ付けられた」、その目鑑橋であると判明した。本人に話を伺った際、「その記録は襖（ふすま）の下貼りに用いられていたもの」と言いつて、苦笑されたことを思い出す。

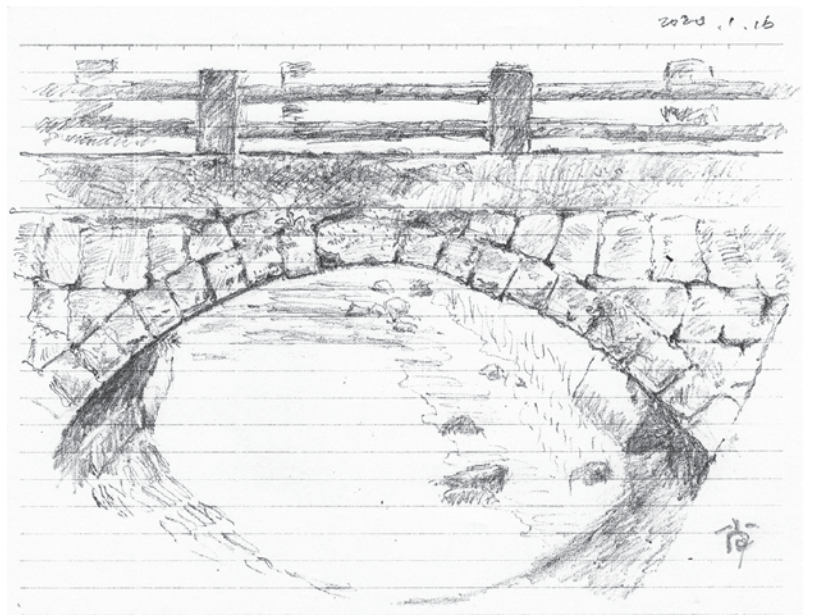
松合橋に使用されている石材については、池辺伸一郎さん（現・阿蘇火山博物館館長）に見てもらったところ、基礎部分は弱溶結凝灰岩、輪石は宇土

半島北側の宇土市で産出する溶結凝灰岩「馬門石」で、壁石は天草産の砂岩であると分かった。馬門石は淡紅色が特徴であると知られているが、松合橋の輪石に使われている馬門石にはかなり色あせたものがある。

それら3種類の石材は船で運ばれてきたと考えられる。その訳は、宇土半島の主要道路が古代から近世まで標高の高い地点を通過しており、標高の低い海沿いの道は曲がりくねり、半島南岸の海沿いの道は江戸時代中期なつてやっと利用されるようになったからである（宇土半島の歴史の道」高木恭一著）。

松合橋の輪石を真下から見上げると、要石は1列ではなく2列並んでいて、上流と下流側の最も端だけ横に長い要石が各1つ使われている。これは県内では珍しい輪石の構造と言える。

ちなみに熊本県内に現存するめがね橋で築造から200年を超えているのは、山鹿市菊鹿町の「洞口橋」（1774年）、熊本市北区植木町の「豊岡橋」（1



松合橋 ※壁石脇を通る金属管を削除
スケッチ画 / 上塚尚孝

802年）、上益城郡御船町の「門前川橋」（1808年）、下益城郡美里町の「雄亀滝橋」（1818年）、同町「風呂橋」（1819年）がある。

ところで不知火町は旧暦8月1日の八朔（新暦の9月中旬）のころ、海上に不思議な光が点滅することで知られる。この光は、景行天皇九州巡幸伝説に登場する「不知火」であるといわれ、八代海に面した永尾（えいのお）神社には毎年、この神秘の光を見ようと多くの見物客が訪れる。

三五郎は 八面六臂か(朱夏)

岩永三五郎が熊本藩領の矢部手永で携わった土木事業について、笹原佗介著の「布田保之助惟暉翁伝」には次のように紹介されている。

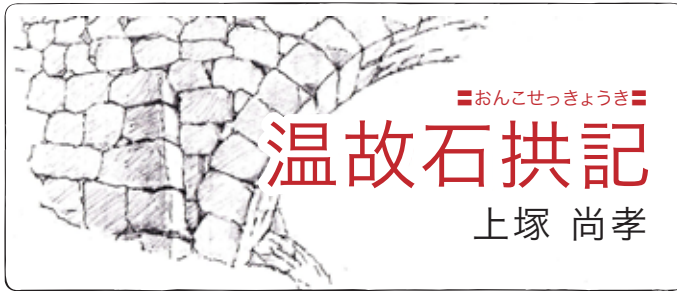
「一、男成川目鑑橋(おとこなりかわめがねばし) 渡十一間(中略) 天保二年十一月着手 同三年五月成就 石工棟梁八代手永岩永三五郎」「二、下馬尾河目鑑橋(げばおがわめがねばし) 渡八間(中略) 天保四年十一月成就 石工棟梁八代手永岩永三五郎」

男成川目鑑橋の架橋は1832(天保3)年で現在の山都町の笹原川に架かる聖橋、その翌年架橋の下馬尾河(川) 目鑑橋は同町の千滝川に架かる浜町橋のこと。八代手永は八代郡または同郡の野津手永の誤りであろう。

1954年に藩政期最大の石造水路橋「通潤橋」築造を実現した布田保之助が惣庄屋に就任したのが34(天保5)年だった。しかし、三五郎はその後、鹿児島藩に招かれることになる。

後任に種山の宇市を推薦か

岩永三五郎の門弟には種山手永の宇



助・宇市の兄弟がいる。長男の宇助を石工頭とする種山石工衆は、46(弘化3)年に砥用手永の霊台橋架設工事に従事したが、宇助はその後石工を引退して酒屋を営んだ。そのため三五郎は自分の後任に次男の宇市を推薦したと考えられる。通潤橋にある石碑には「石

温故石拱記 上塚 尚孝

工頭/矢部小笠原村 宇市」と名が残っているが、それは宇市が父の嘉八と共に種山から矢部に移住したためである。本会の副会長だった飯屋時春さん(故人)がその住所変更届の写し(原本不明)を持っておられた。さて、岩永三五郎は1840年に薩摩へと出発し、各地で土木工事を手掛けている。「鹿

児島県維新前土木史」(鹿児島県土木課)によると、鹿児島城下の掘り割りに小規模な「吉野橋」「孝行橋」「潮見橋」などの改築を行った。それらは腕試しと考えられる。翌41年には鹿児島港の北寄りの地に埠頭(ふとつ)を築造し、これは通称で「三五郎波戸(はと)」と

呼ばれたらしい。そしていよいよ、甲突川下流域の改修工事に取り組む。すなわち石橋架設の前段階として川幅をそろえ、堤防や護岸を整備し、河底のしゅんせつを行うなどである。

岩永三五郎は河川を見る目が違う。奈良・興福寺の阿修羅像は、3つの顔で正面、左右を凝視し、6本の腕を持つ。この年、名工は47歳だけれど、川を流れる水の心を知る総合的な治水術を誰に教わったのだろうか。

霧島神宮に手水鉢を奉納

三五郎は43(天保13)年に一度熊本に戻り、鏡町の印鑰(いんにやく)神社再建のために石工の金右衛門と喜三次と仕事を共にした記録が、同神社の覚書板(棟札)に残されている。そして再び5月に薩摩へ向かった。

そのときの道中で霧島神宮に立ち寄って、石造の手洗鉢を奉納したようだ。現在も残る手水鉢の脚部には「奉納 肥後国石工 岩永三五郎 天保十三 壬寅 九月吉祥日」と刻まれている。神宮を訪ねた際、手洗い場の竜頭(りゆうづ)も三五郎が奉納したものだと社務所の人から聞いたが、精巧な出来だった。

この年には、鹿児島市を流れる稲荷川の砲真橋改め「永安橋」、「稻荷橋」と「大乘院橋」の架橋に従事したこと

が「鹿児島県維新前土木史」に記されている。また言い伝えによると、翌年に指宿の「宮ヶ浜堤防」の築造、大口の堤防修理工事などを行ったといわれている。指宿の宮ヶ浜は、鹿児島県在住の木原安妹子さんに案内いただいたと記憶するが、直方体の多数の石材をそれぞれずらして積み重ねた堤防で、一見して荒れた海の波にも不動の船溜まり堤防だと感心した。

三五郎が50歳になった年に元号が「天保」から「弘化」になる。以下、同土木史によると薩摩郡川内町大字東手字飯屋崎に「仏性橋」「水ノ手橋」、指宿町大字西方の「湊川橋」を架設。明けて45(弘化2)年、岩永三五郎は国分小村で干拓工事を担当し、120町歩(約1200畝)の新田を拓く。この際の監督者は海老原清熙だった。

(2020年1月7日記、次号に続く)



岩永三五郎が霧島神宮に奉納した手水鉢
撮影/木原安妹子

おもいででの石橋



井之上尚史(熊本県)

橋梁の技術コンサルタントとして福岡市で勤務するようになった社会人4年目のこと。上司に誘われ、2003年の5月1日から2泊3日の日程で「石橋巡りツアー in 鹿児島」を決定した。人生初の石橋だけを巡る旅行である。

旅のバイブルは木原安珠子著「里の石橋453」。事前に下調べをし、3日間で21橋の石橋を訪問した。そのとき最初に訪れたのが、私の父方の祖父の出身地、大隅町(現・曾根市)の「恒吉太鼓橋」

恒吉太鼓橋で受けた厚意



流失する前の恒吉太鼓橋
|| 2003年5月 井之上尚史撮影

(1790年架橋だった。

朝7時過ぎに橋に到着し、それから夢中で写真を撮った。1時間ほどして空腹を感じたとき、「一台の軽トラが近くに止まった。運転手は地元の人のように、「何しているの?」と話しかけるので、「石橋の写真を撮っているんです」と返すと、彼はわれわれが遠方から来たことを喜んで、配達途中の商品である、まだ温かい厚揚げをくれた。それが非常においしかったことを覚えている。

恒吉太鼓橋は2016(平成28)年の集中豪雨で流失して226年の歴史に幕を下ろしたが、今はあのとときに受けた厚意と共に思い出す石橋となっている。

編集後記

中面で長崎県諫早市の「親子眼鏡橋」を特集しました。築造当時、最高のものを目指した諫早眼鏡橋の技術面について、編集の都合で取り上げることができなかったのが心残り。いつか紹介の機会があればと思っています。

(会報担当・中村まさあき)

募集!

「おもいででの石橋」写真と原稿

流失、撤去、移設された石橋などの現存時の写真を募集しています。石橋に関する当時の思い出と共に原稿(440字程度)をお寄せください。写真は必ず返却いたします。問い合わせや投稿は左記事務局の中村まさあき宛。

▷koho@ishibashi-mamorukai.jp

石原史彦会員(熊本県) 石橋絵画と押し花作品展

石原史彦会員の石橋絵画と母堂の押し花絵作品(見学無料)が本年8月6日から16日まで、熊本市西区島崎の島田美術館で展示される。

石橋にひかれ熊本を採訪

事務局長 軸丸英頭(熊本県) 大阪で「敬天まちづくり大学」を主催する芦田英樹会員が昨年11月、受講者7人を連れて熊本に採訪されました。兵庫の片寄俊秀元会長から石橋の魅力を感じて、熊本の石橋群を見てみたいと思われたそうです。

橋、すでに復旧なった美里町の二俣福良渡目鑑橋など、10橋余りを採訪され、すっかり石橋に魅せられたようです。7人全員が当会に入会いただきました。このところ関西在住会員の増加が続いています。

サインペン画「立門橋」



[石橋と野の草花親子展]

期間 2020年8月6日(木)~16日(日)
会場 島田美術館ギャラリー
熊本市西区島崎4-5-28
TEL 096-352-4597
開館 10:00~17:00、火曜休館

明治期の石積みみの埠頭が残る宇城市の三角西港や八代市東陽石匠館を見学の後、震災からの復旧が進む宇土市の船場橋や山都町の通潤



通潤橋にて。中央の男性が芦田英樹氏
写真提供/軸丸英頭

大会情報 2020年5月24日(日)・25日(月)
第41回大会を福岡県八女市で開催

日本の石橋を守る会

～石橋とその文化を大切に～

会報96号(通算) 2020(令和2)年3月16日第1版発行
同年4月9日第2版

代表者 会長 上塚 尚孝
事務局 〒861-3513 熊本県上益城郡山都町下市182-2
通潤橋史料館内 ☎0967(72)3360
HP <http://www.ishibashi-mamorukai.jp>
BBS <http://9328.teacup.com/jsbp/bbs/>